

松本哉 *matsumoto hayime*

荷井永風

東京空間



松本哉 *matsumoto hayime*

永井荷風の

東京空間

河出書房新社

永井荷風の東京空間

松本 哉（まつもと・はじめ）

本名・松本重彰。昭和18年神戸に生まれる。昭和42年神戸大学理学部物理学科を卒業し、上京。河出書房および東京図書で主として科学書の編集に従事。

現在・絵本作家、イラストレーター。

著書に『すみだ川気まま絵図』『すみだ川横丁絵巻』『芥川龍之介の顔』（以上三省堂）、『東京下町散策図』（新人物往来社）、『今朝の一句』（共著・河出書房新社）がある。

一九九二年二月一〇日 初版発行
一九九三年一月一四日 再版発行

著者 松本 哉

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

〒151

東京都渋谷区千駄ヶ谷二二二二
電話 〇三三四〇四一二〇 営業

〇三三四〇四一八六一 編集

振替（東京）〇一〇八〇二

印刷 亨有堂印刷

製本 小高製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします
定価は帯・カバーに表示しています

©1992 Printed in Japan
ISBN 4-309-00809-7

序

永井荷風を好きな人には、これほど面白い本はない。そんなものを書いてみたいと思いました。しかし、個人の力には限界があり、すべてを知りつくして面白さを解剖することはとてもできそうにありません。相手は相当に偉いのであり、風変わりでもあり、実際に会ったこともない。

永井荷風という人が過去にしてくれたからこそ、自分は大いに東京を楽しむことができたと言えます。その体験談を書き綴ることにしました。絵あり、地図あり、写真あり。東京の山の手や下町、さらに近郊の市川や船橋に足をのばし、もつとずっと遠くの明石、岡山にまで出向いて「荷風散策」をやってみました。そして、はからずも浮かび上がったのが「東京空間」と仮に名づけた一種異様な別天地の魅力。荷風さんも喜んだのでしょうか、ボク自身も大いにそれを堪能してきましたようです。

机に向かって荷風の作品や日記に親しみましたが、事実は小説よりも奇なり。人に会い、雑踏にもまれ、川風や神社仏閣の空気にさらされてこそ、永井荷風もよくわかり、第一に楽しいのです。変貌に変貌を重ねている東京のようですが、いかにそれが表面だけのことであるかもわかりましょう。いや東京だけではありません。どこの都市にも田舎にも、あいかわらずの「空間」は厳然と存在し、荷風さんの感じたような「感動」も「嫌悪」も「奈落」もそのままなのです。

目次

序

1

永井荷風逝去の頃

11

荷風生誕地の背景

19

神田川の川霧

水道端と丘陵

なだれ込む坂道の数々

荷風生誕地はここ

わが礫川徜徉の記

江戸文人・大田南畝とのゆかり

「紐」のごとく

現場の直感

多福院の現状

懸崖の山霧

断腸亭跡の新時代

心配な息子

『監獄署の裏』は今

「断腸亭」の誕生と最期

新たな感慨

47

「偏奇館跡」変貌記

激変の果て

道源寺坂と偏奇館跡の発見

偏奇・荷風散人の素顔

激変のひずみ

55

墨東今昔

67

ある文学青年

絵入りの小冊子

墨東の俳人

玉の井昨今

吉原周辺の記

84

鬼門

浅草の不思議

公園

衣紋坂

吉原はなぜ存在したか

吉原の残骸

浄閑寺なる荷風詩碑

取り壊される浄閑寺

荷風さんの身長

元八幡(富賀岡八幡宮)への道

110

近所の旧跡

沈んだ石碑

市川市八幡町

119

葛飾八幡神社

天然記念物「千本公孫樹」

市立図書館で一服

大黒家のカツ丼

手児奈堂境内「此君亭」のこと

126

弘法寺山門

猪場穀氏のこと

時は流れて

東へ東へ

143

真間川の春

東のはての「葛羅之井」

明石の散策と岡山眺望図

154

山門はなはだ古雅なり

岡山へ

他郷でのスケッチ

感涙禁じがたし

地獄の沙汰もカネしだい

二人の同時代人

182

酔狂メモ

天下の物理学者アインシュタイン

同年輩だった寺田寅彦

風呂と端唄

夢二と龍之介

荷風日記の面白さ

198

荷風自伝(その1・日本再脱出の挫折)

荷風自伝(その2・多事多難)

荷風自伝(その3・老いへの挑戦)

東京風情

浅草をよろこぶ

ものの値段

誕生日の生涯

わが荷風本茶話

219

東京の古本屋

永井荷風全集

売る

荷風全集「第29巻」

ほんとの荷風本秘話

〔付録〕 実例「荷風本」の相場

永井荷風・見開き年表

238

巻末記

240

索引

243

〔付図〕 空から見た東京全景

248

東京全景・総索引

251

カバ―絵 永井荷風筆・白画像
装 幀 菊地信義

永井荷風の東京空間

永井荷風逝去の頃

あれは神戸の中学校三年生のときでした。校内の廊下の壁にぼっちゃりとした丸顔のお姉さんの写真が貼り出されたものです。

「皇太子妃に決まった正田美智子さん」

がそれでした。中学生のボクらには何の言うべきこともなく、黙って眺めたと思います。今から三十四年前のことです。当時の皇太子は現在の天皇です。美智子さまの名前をもじって、世間にミッチー・ブームなるものがわきおこり、そのピークが半年後の「御成婚の儀」でした。御馬車でのパレードが行なわれ、その華やかなご様子はテレビで全国に放映されたものです。もちろんまだモノクロ放送の時代でしたが、テレビ受像機が急速に普及しはじめたのはその頃で、多くの人々が自分ちのテレビでそれを見たはずで、

防弾ガラスのはめ込まれた自動車などなく、両殿下はオープンカーの御馬車に揺られ、上半身を風に吹かれて、手を振っておられた。戦後の混乱期を抜け出し、日本もふたたびご繁栄という状況を象徴する出来事だったと言っているでしょう。「騒ぎすぎだ!」と水をさすご仁もいたと思いますが、夢の絵巻を見るような熱狂であったことも確かです。

その頃の永井荷風さんは、もうかなり人生にくたびれてきていたようで、日記も簡単そのもの。「皇太子妃決定」の日も、

「昭和33年」十一月廿七日。晴。正午浅草。

だけです。しかし、晴れの日も雨の日も毎日々々浅草へ出かけていましたから、世間でわいわい言っていることくらいは知っていたでしょう。そして、パレードの行なわれた昭和三十四年四月十日、金曜日ですが全国一斉の祝日となりました。荷風さんはその一カ月くらい前に浅草ですっ転んで「病魔歩行ほとんど困難」を覚え、この頃には市川市八幡の自宅に閉じこもりの状態です。日記も日付のほかに「晴。」ぐらいしか書いておりませんが、その日には特に「祭日。晴。」と記されていますから、特別の日だったことはご存じだったと思われます。

こういうことを思えば、ボクも荷風さんと時代を共にしたという実感がすこし湧くのですが、こちらには若々しかった。あこがれの高等学校へ無事入学。校舎の窓から神戸の市街と海を見下ろすことができ、絶景でした。わが家にもめでたくテレビが備え付けられたのもその頃だったでしょう。床の間でしたねえ、あの頃テレビを置く場所は。屋根の上にひょろりとアンテナを立てるので、「あ、あの家もテレビを買った」とすぐわかったものです。

入学して一カ月ほどした頃です。現代国語の授業の一場面が記憶に残っています。講義の一段落した折だったのか、立っていた教師が黒板の前の教卓に座り、「永井荷風という作家が死んだ」とおっしゃった。しかし、高等学校に入りたての生徒たちに特別の反応のあったはずはなかったのではないのでしょうか。荷風を読むような年齢にもとうてい達してないし、名前を知っているぐらいが関の山みたいなシーン、というよりキョトンとしたものです。ボクも変なことを知っていただけで、さっそく

隣の席に座っている生徒に「ストリップ好きの作家よ」とか何とかさやいたものです。「ストリップ」なんて言葉は、当時の高校生が口にするにはちょっと勇気の要るものでした。隣の生徒も驚いたのか、聞き間違いないかという風に「えっ？」とこちらの顔を見ました。しかしそのとき「おっ！」と思ったのが国語の教師だったようで、「おいそこのやつ、何か言いたいことがあるんか」と、首を伸ばしてこちらを指差しました。私語だから言えるので、みんなの前で荷風氏とストリップの関係を言うほどの勇氣はありません。いや、何か言えるほどの知識も関心もなかったのです。こそそこそとうつむいただけでした。

そのあとのことは覚えていないのですが、あのときあの教師はどんな風に荷風の死を語ったのでしょうか。教室なんかで、十五、六歳の少年少女を前にして。

ここにあるのが当時の新聞です。荷風氏の遺体が発見された日の「朝日新聞」の夕刊。第一面に顔写真入りで出ていますが、「あっと驚く衝撃の死」という風には見えません。「偉い方がお亡くなり」という淡々とした扱いのようです。ストリップのスの字も出ていません。見出しは「永井荷風氏が急死」。

【市川発】千葉縣市川市八幡町四ノ一二二八に住む芸術院会員、作家永井荷風氏^(七)が、三十日急死しているのを朝八時ごろ同家にきた通いの手伝い婦、同市菅野町五ノ三一五、福田とよさん^(五)がみつけ、付近の佐藤優剛医師に知らせた。

記事はこう始まっていますが、何だか「芸術院会員」というのが効いています。荷風氏自身は、

朝日新聞 (夕刊)

(第一面トップ記事)

投票の出足好調 統一地方選挙として最後の市町村長、市町村議会議員（五大市を除く）および東京都特別区議会議員の選挙の投票は三十日午前七時から全国各地で一斉に行なわれた。

(天氣予報欄)

高気圧が東西にながく、帯状にのびているので、あすのメーデーはよいお天気のようにだ。このところ高温が続いており、東京ではシオカラトンボが飛びはじめた。

永井荷風氏が急死